

もう今年も終わりやなあ、というような声をあちこちで耳にする今日この頃だが、そういう言葉を聞きたびに、
(やめてっ！)

と内心叫んでしまう。なにしろ、つつがない年末を迎えるまえにやるべきことは山積みなのである。できればなるべく長く「今年」が続いてほしいと願っている私です。ところで「来年の話をする」と鬼が笑う」とかいいうけど、あれはたとえば十二月に入っても有効なことわざなんだろうか。

「あのさあ、来年の一月にさあ、一緒に旅行に……」

「ああっ、ダメっ」

「なにがダメなのよ」

「来年のことをいうと鬼が笑うっていうだろ。今、完全に鬼が笑ったはずだよ」

「そんなこと言ったって、もうあと二週間で来年なんだから……」

「ああっ、ダメっ。また言った！ 頼むから発言には注意してくれないかなあ」

「でも、一月のスケジュールをそろそろ……」

「ああっ、勘弁してっ。もう、いやだ。お願いだから……」

「なにも泣かなくてもいいじゃない。わかったわよ。来年の話はしないから」

「よかった。これで安心だよ」

「でもさ、どうして来年の話をしちゃいけないの？」

「そりゃ、鬼が笑うからだろ」

「どうして鬼が笑っちゃいけないの？」

「うーん……そう言われてみれば……」

「ふだん、怒ってる鬼が笑うんだから、いいことじゃない」

「そうか！　じゃあ、来年の話をするのはいいことなんだ」

「そうよそうよ。もっと来年の話をしまくりましょう」

ということになりかねない。この手が有効ならば、桃太郎も源頼光も一寸法師も、ただひたすら「来年の話」をすればいいわけだ。鬼どもが笑い転げているところをやっつけるのは、金魚をすくうよりたやすい。

さて、ようやく懸案だったジャズミステリー連作短編集「落下する緑」（東京創元社）が発売になった。めでたいなあ。「鮎川哲也の本格推理」という文庫版アンソロジーに収録されたデビュー作（表題作。「幻のデビュー作」とか宣伝には書いてあるけど、e・NOVELSではいつでも買えるんですけど……）も収録されている。めでたいなあ。帯はなんと、あの人！　山下洋輔大先生に書いていただいた。めでたいなあ。表紙と各章の扉は藤原ヨウコウ改め森山由海大先生に描いていただいた（扉は、レコードジャケット仕立てになっていて、白黒だと魅力半減なのだが、森山さんのブログにカラーバージョンが掲載されているので、ぜひそっちも見てほしいです）。めでたいなあ。苦労した推薦レコードのコーナーのジャケ写（全部で二十一枚！）もばっちり載っている。めでたいなあ。でも……初版部数があまりに少ない。めでたくないなあ……。とにかく駄洒落なし、グロなし、ギャグなしの「三なし小説」である。軽い話なので、軽く軽く、羽毛のように軽やかに読んでいただければさいわいである。売れてほしいなあ。あんまりどかーんと売れなくてもいいから（そういう期待は最初からしてません）、ちょっとは売れてほしいなあ。

なにしろ初版部数があまりに……え？ もうその話はいいで
すか。

というわけで、今回は「おたく」の続編である。

世間ではいろいろと物騒な事件が相次ぎ、

「ドラえもんの声優がかわったよね」

などと、ちよつとアニメの話でもしようものなら、

「お、おまえ、おたくか」

「やばーっ。変態やん」

「どうせ、アダルトゲームとロリコン同人誌をいっぱい集めてるのよ」

「警察に言おか」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。なんでそんなこと言われなあかんねん」

「だって、ドラえもんの声優のことなんか、正常な一般人は知らないわよ」

「ドアをロックしろ。逃がすんじゃないぞ」

という雰囲気になっているが、おたく＝変態という決めつけは大間違いである。変態はおたくのなかにもいるし、おたくでないひとにもいる。しかも、変態はこの世にうるおいを与える、なくてはならない存在である。

だが、あの「電車男」を読んでもわかるように、世間はおたくに冷たい。なぜだろう。おたくの容姿がいかんのか。一般に言われているおたくは、小太りで眼鏡、ニキビ面、髪の毛やや薄くフケあり、脂ぎっている、リュックを背負っている、ジーパンにＴシャツ……といった感じではないかと思うが、それはおそらくおたくと呼ばれるひとのパーセントぐらいにすぎないはずだ。ほとんどのおたくは、一般人となんら変わらない容姿をし、フツウの生活を送っているように見えていて、深く話してみると、その異常性はじめてわ

かる。「異常性」と書いたが、たしかにおたくは異常である。異常でない範囲におさまっていてはとうていおたくとは呼べない。そんな生ぬるいやつはおたくの称号にはふさわしくない。そう、おたくは称号であり、褒め言葉である（と思う）。だが、最近、おたくという言葉の使われかたが、私の思っているそれとは微妙にずれてきているような気がしてならない。私は、

「あなたはおたくですね」

というのを完全に、心から、百パーセント褒め言葉として使っているが、相手がムツとするときがある。

「私はただのマニアでおたくではありません」

そういうとき、その相手は、

「私はあんなアキバ系の、変な外見をした、変態ではありません」という気持ちなのだと思う。これはおたくという言葉を蔑称としてかんちがいしているために起こる誤解だ。

例の「オタク検定」というのもなんかズレを感じる。公式ページによると、同検定のオタクの定義とは、

1. 漫画、アニメ、ゲームのいずれか一つ以上を、その多少に関わらず、好む人あるいは受容する人。
2. 漫画・アニメ・ゲームに関連する事柄。
3. 日本を発信源とする漫画・アニメ・ゲームの総称。

だそうで、「補説」として「広く漫画・アニメ・ゲーム及びこれを楽しむ人々を指す総称」とも記されている。いまどきの日本人で、マンガやアニメを少しでも受容しないひとがいるだろうか。この定義は私の考える、おたくの定義とはまるっきり逆である。おたくとは、こんな生ぬるい、生やさしい、誰でもなれるものではなく、詩人や画家、彫刻家といった人

たちと同様、それ以外にはなりようのないひとが自分の意志とは（ある程度）関係なく、どうにもならぬ呪われた運命によってなるべきものであり、神だかなんだかによって選ばれた、偉大な選民である。マンガ、アニメ、ゲームに限定されているのも変だよなあ。あと、この検定だと、たとえばアニメに対して「幅広い知識」を有しているひとが合格してしまうわけだけど、アニメのことを何でも知っているひと、というのは「物知りのご隠居さん」みたいなもので、おたくというのは、ほかのアニメことはまるで知らんけど、「ガンダム」だけについては、監督やプロデューサーよりも詳しい、というひとであるべきではないか。それこそガンオタであって、アニメのことはなんでも知ってるよ、ガンダムももちろんよく知ってるよ、というひとは、まっとうなアニメファンというだけでないのか。

最近、よく聞く、

「私は釣りおたくですから。はっはっはっ」

などという発言もおかしい。それは「釣りキチ」とか「釣りマニア」というべきであって、おたくという言葉をそれらと混同して使ってはいけない。

「私はパチンコおたくなんです」

「車おたくです」

「ワインおたくです」

どれもこれも、私見によると、誤用である。「マニア」と「おたく」がどちらがつのか、というのはよく議論されるところだが、やはりその両者のあいだには差があると思うし、また、「おたく」と「おたくっぽい」も全然ちがう。

以下、私のおたくに対する考えを述べたい。あくまで私の考えなので、

「そんなん、全然ちがう」

といわれても知りませんよ。

まず、おたくが対象とする目的物は、アニメやゲームやマンガでなくてもよい。おたくとは、世間から少しずれたところに異様なまでの興味と好奇心を抱き、それに対して誰よりも深い知識を得ようとするひとだと思う。この「世間から少しずれたところ」というのがまずポイントで、釣りとか囲碁・将棋とか切手集め、鉄道、ワイン、車……といった、普通の趣味の延長にあるものはおたくとは呼べない。それらは、極度のマニアというべきであろう。だが、「深海魚釣り」とか「平安時代の囲碁」とか「死亡事故を起こした車」などが対象であれば、それはおたくと呼んでさしつかえない。

つぎに、おたくとは、その対象物に耽溺することによって、人生が曲がってしまった、というほどののめり込みかたをしているひとだと思う。フツーにちゃんと仕事をし、フツーに結婚して、シアワセな家庭を築くかたわら、テレビで毎週、アニメを録画して見て、関連ムックを買ひ、たまにイベントに参加したりする程度では、とうていおたくとは呼べない。これは単に「おたくっぽい」ひとというだけである。家族や親戚から後ろ指をさされ、たとえ結婚していても嫁はんからはものしられ、趣味のために仕事も転々とし……ろくでもないやつと思われていながら、その道のマニアに何か質問されると、的確な答を即座に返し、

「アレはまさか持っていないでしょう。日本にはひとつしか入荷していないという話ですからね」

と言われると、

「ああ、アレですか。ふたつ持っています」

と涼しい顔で言う。もちろん、めっちゃめっちゃ尊敬されるが、その尊敬がほとんどのひとには理解されない。人生における何かを捨てて、そのピンポイントの尊敬を勝ち得るのがおた

くである。

今は、それほど流行っていないアニメに関しても情報があふれ、設定集やセル画や裏話や……その手のものが書店でごくあたりまえに手に入る。そういう簡単に手に入るものをフツーにお金を出して買うだけのひとが、

「私はおたくです」

というのは「おたくっばい」というだけだ。怪獣好きが嵩じて、円谷プロに入社してしまう、ぐらいの、人生を賭けた行為が必要である（そういうひとがマジにいるから怖い）。

また、おたくは、自分のことをおたくとは思っていない。

「あなたはおたくですね」

と言うと、真剣に否定し、

「私なんかはおたくじゃありません。おたくというのは。。。さんとか。。。さんみたいなひとのことを言うんです。あのひとたちにはかないません。あのひとたちはめっちゃめっちゃすごいですよ。たとえば……」

と、自分の尊敬するおたくの名前をあげる。

最後に、おたくは、自分がおたくであることに、ある種の誇りと同時に劣等感も持っていて、たま〜に、おたくでない生き方もしてみようかな、と思ったりする。流行のファッションを着、合コンに行き、カラオケでアニソン以外のものを歌い、フレンチレストランで食事をし、知り合いの女の子と書店やゲーム店、イベント以外の場所（遊園地とか）でデートをしてみようと試みる。だが、がんばってそういう暮らしをしていても、やっぱり居心地のいいおたく生活に戻ってしまふ。

それがおたくだ！

え？ 全然ちがう？

そうなんです。私には結局おたくのことはわかりません。

萌えとかやおいがわからんのと同様ですわ。

でも、ひとつだけわかつているのは、今のおたくは、秋葉原ではなく田園調布のほうに移っているらしい。それは、大田区？

あ、そうそう、ひとつだけわかつているのは、今のおたくは、意外に親切でいろいろなことを教えてくれるらしい。それは、おーたくに教えられ？

あ、そうそう、ひとつだけわかつているのは、今のおたくは、釣りに行くと、釣った魚に墨を塗って、紙に押しつけるらしい。それは、魚拓？

なんだかわけがわからなくなってきたので、このあたりでやめたいと思います。

「落下する緑」よろしく！

よいお年を！

(了)